〈昭和52年度委託研究〉

中学生・高校生における看護婦の職業イメージの形成について

松　本　純　平*
岡　本　英　雄**

目　次

1. はじめに …… 2
2. 看護婦の職業イメージの特徴 …… 2
2－1 質問項目への回答 …… 2
2－2 質問項目への回答にみられる学年変化 …… 3
2－3 就職希望の構造からみた看護婦の職業イメージ
——数量化理論第Ⅲ類をつかって …… 5
3. 就職希望の形成 …… 8
3－1 「看護婦」の就職希望群，非希望群の各質問項目への回答 …… 8
3－2 就職希望の要因分析
——数量化理論第Ⅱ類をつかって …… 10
4. む す び …… 14

* 職業研究所
** 上智大学文学部社会学科

1. はじめに

看護学生を対象として，入学までの進路選択状況を調査してみると，看護学生が看護学校入学を決めた時期は，たとえば保母学生などに比べると，高校入学以前に決定する者の割合は非常に高い。このことは，学生・生徒を対象とした多くの希望職業調査で明らかになっている<看護婦が，小学生・中学生・高校生と年齢増加にともない，希望する者の割合が漸減する職業に属している>という事実と合わせると，次の推測が成り立つのではないだろうか。すなわち，看護婦を希望し，看護学校に入学してくる学生は，小さい頃の希望を保ちつづけた人々であると。しかしながら，この推測は必ずしも当ってはいないようである。調査結果によれば，看護学生の中で中学生以前に看護婦に憧れたとする者は，たかだか半数にすぎないし，決定の時期が早いといっても，他の専攻の学生との比較の問題であって，看護学生の約4分の3以上の者は，高校時代以降に意志決定をしていると回答しているからである。[1]それでは，中学時代・高校時代を通し，学生・生徒達は，看護婦という職業と自分の進路をどのように関係づけていくのだろうか。ここにこの問題に直接答えるだけの資料はない。ただ次のことは指摘できよう。いづれにしろ，看護学生の進路選択状況を理解する上でも，また看護マンパワーのための長期的ビジョンを考える上でも，一般に，中学生・高校生が看護婦という職業をどのようなものとして認知しているのかを知ることは重要なことだと。

しかしながら，特定の職業に焦点を合わせたこの種のデータもほとんどないといってよい。そこで，ここでは，新しく調査するには基礎的データも不足しているし，また十分な妥当性の検討をしてからでないと，特定の職業に焦点を合わせた調査はともすれば中学生・高校生の意識の現状にそぐわないおそれもあると考え，筆者らが以前おこなった職業イメージに関する一連の調査データ[2]を用い，看護婦の職業イメージおよびその背景と形成という観点から，集計し直しを試みた。中学生・高校生の看護婦の職業イメージの特徴を概観し，次なる課題への資料にしたいと思ったからである。

この調査データは，付録1に示されたA～Nの14の職業に対し付録2のような14の質問項目毎に，「そう思う」，「そう思わない」，「わからない」のうち1つを選択するものである。（付録1に示されたZ01～Z10の10の職業については，Q14の「就いてみたいか否か」のみ質問された）調査は昭和45年10月から11月にかけておこなれ，全国12都府県にまたがり中学校9校，高校13校において3年生の1クラスを選んで実施された。ここで再集計の対象となったのは，そのうちの中学生女子163名，高校生女子241名，計404名分である。

2. 看護婦の職業イメージの特徴

2－1　質問項目への回答

この調査に関して，中学生・高校生が，具体的にどのような看護婦の職業イメージをもっているかという点については，すでに報告されている。その特徴を要約してみると次のようなものである。

看護婦の職業イメージは，「仕事は単調でなく，体が汚れることは少なく，世間の評価は低くなく，親の反対は少ない。しかし，仕事に自律性がなく，疲れる仕事であり，早朝や深夜に働くことが多く，日曜や祭日でも休めないことが多く，必要な技能や知識を習得するには時間がかかる。収入も低い。」[3]

ここでは，以上の職業イメージを中高差，および他の職業のイメージとの違いなどからさらに明らかにしてみたい。

2−2 質問項目への回答にみられる学年変化

表1は，14の項目毎に回答の中高差を整理したものである。χ^2値をみると，中学生と高校生の回答の分布に統計的に有意な違いがみられるのは,5項目あり，それは，「収入」，「仕事の自律性」，「適性」，「親の反対」および「就職希望」である。「収入」，「仕事の自律性」，「適性」，「就職希望」については，中学生は，高校生に比べて，肯定的な回答をし，「親の反対」については，否定的な回答をする傾向がみられる。すなわち，中学生は，高校生に比べると看護婦の職業イメージとして，収入，仕事の自律性について，プラスのイメージをもち，親の反対はないと考え，自分に向いていると判断し，就職を希望する者も多い傾向がみられる。以上5項目以外では，「身体の汚れ」について，5％水準で有意とはいえないが回答にやや違いがみられる。しかしながら中学生と高校生の職業イメージには差が少ないといえる。それは，これら14項目への回答分布の中高差のあり方を,他の職業のイメージと比較してみればわかる。

表1 「看護婦」の職業イメージの中学生・高校生比較

		そう思う	わからない	そう思わない	χ^2 値
Q1 収入	中	35	43	85	6.20 ＊
	高	48	41	152	
Q2 作業環境	中	71	29	63	0.69
	高	105	36	100	
Q3 早朝・深夜の労働	中	156	−	7	3.75
	高	238	−	3	
Q4 日曜・祝日の休み	中	153	3	7	2.30
	高	232	1	8	
Q5 疲労	中	156	3	4	0.56
	高	234	3	4	
Q6 仕事の単調さ	中	15	17	131	0.23
	高	24	22	195	
Q7 仕事の自律性	中	10	29	124	16.05 ＊＊
	高	8	15	218	
Q8 適性	中	29	48	86	8.11 ＊
	高	29	51	161	
Q9 親の反対	中	30	43	90	10.36 ＊＊
	高	74	40	127	
Q10 身体の汚れ	中	54	32	77	5.82
	高	71	30	140	
Q11 世間の評価	中	28	29	106	0.59
	高	42	36	163	
Q12 将来性	中	53	51	59	1.61
	高	78	63	100	
Q13 技能習得の困難度	中	134	10	19	2.00
	高	184	20	37	
Q14 就職希望	中	55	28	80	17.24 ＊＊
	高	45	29	167	

＊5％水準で有意　＊＊1％水準で有意

表2　14職業の職業イメージの中高比較

	A 医師	B 中高の先生	C 喫茶店等経営	D 新聞雑誌記者	E オフィスガール	F 商店店員	G 農業	H プログラマー	I 理美容師	J 看護婦	K タイピスト	L テレビ組立係	M 靴下編工	N ウェイトレス
Q1 収入	＊		＊＊	＊＊		＊＊			＊＊	＊				＊＊
Q2 作業環境		＊＊						＊					＊＊	＊＊
Q3 早朝・深夜の労働		＊＊	＊＊		＊＊			＊＊	＊		＊＊	＊＊		＊＊
Q4 日曜・祝日の休み	＊＊	＊＊	＊＊		＊	＊＊	＊＊	＊＊	＊＊		＊＊	＊＊	＊＊	＊＊
Q5 疲労	＊		＊＊		＊＊	＊		＊	＊＊		＊		＊＊	＊＊
Q6 仕事の単調さ	＊＊	＊＊	＊＊	＊＊	＊＊	＊＊		＊＊	＊＊		＊＊	＊＊	＊＊	＊＊
Q7 仕事の自律性	＊＊		＊＊		＊＊	＊＊		＊＊	＊＊	＊＊	＊＊	＊＊	＊＊	＊＊
Q8 適性	＊＊				＊＊	＊		＊	＊	＊	＊		＊	＊
Q9 親の反対		＊＊		＊＊	＊＊	＊＊	＊	＊		＊＊	＊＊	＊	＊＊	＊＊
Q10 身体の汚れ	＊＊		＊＊		＊＊	＊＊		＊＊			＊＊	＊	＊	
Q11 世間の評価		＊＊	＊	＊＊	＊＊	＊		＊	＊					＊＊
Q12 将来性	＊		＊＊				＊	＊	＊				＊	
Q13 技能習得の困難度			＊＊		＊＊	＊＊	＊＊	＊			＊＊	＊＊	＊＊	＊＊
Q14 就職希望	＊＊	＊			＊＊	＊＊		＊	＊	＊＊	＊＊		＊＊	＊＊

＊5％水準で有意　　＊＊1％水準で有意

表2は，看護婦以外の13の職種について表1と同じように，14の項目毎の回答の分布からχ^2値を求め，有意な差がみられたものを＊印で表示したものである。この表から職業イメージの中高差という点に関し，いくつかのことが指摘できよう。まず，第1に，14項目の中には，中高差が生じやすい項目と，比較的生じにくい項目がみられることである。前者に属する項目としては，「日曜・祝日の休み」，「仕事の単調さ」，「親の反対」，「仕事の自律性」などがあげられるし，後者に属する項目としては，「作業環境」，「将来性」，「収入」などがあげられよう。どのような項目が中高差が生じやすいかという点については一定の傾向はみられないようである。一般に，労働条件や仕事そのものに関連した質問については，年齢と共に経験・知識の量が増すことを反映して，「わからない」という回答が減少し，それに従がって回答分布に違いが生じてくると考えられる。そして，確かに「日曜・祝日の休み」，「仕事の単調さ」，「仕事の自律性」などは，中学生の「わからない」という回答比率は，高校生のそれに比べて有意に大きい。

第2に，職種の中には，職業イメージに関して，中高差が大きいものとそれほどでもないものとがみられる。前者に属する職業としては，「プログラマー，喫茶店等経営，オフィスガール，商店店員，靴下編工，ウェイトレス」，後者には，「新聞雑誌記者，農業，看護婦，中高の先生」などが含まれる。

次に表3は，各職業毎にQ1からQ13までの「わからない」という回答の割合（％）を平均した値である。「わからない」という回答は，職業イメー

ジの不明確さの1つの目安と考えられる。数値の絶対的な大きさにはほとんど意味はないけれど，14の職業の値を相互に比較してみるならば「看護婦」の値は，「農業」に次いで学年差が少ない。さらに，どの職業でも中学生の値は高校生より大きいが「看護婦」についての中学生の値は高校生で最も大きい値（「喫茶店経営」とほぼ同じ水準にある。

表3　職業別「わからない」反応率の平均値

	計	中学生	高校生	差*
A医　師	12.90	16.98	10.15	6.83
B中高の先生	13.04	17.46	10.05	7.41
C喫茶店等経営	18.24	22.03	15.67	6.36
D新聞雑誌記者	17.30	20.71	15.00	5.71
Eオフィスガール	14.14	18.73	11.04	7.69
F商店店員	13.61	18.87	10.05	8.82
G農　業	12.71	14.77	11.33	3.44
Hプログラマー	18.98	24.53	15.22	9.31
I理・美容師	15.51	19.15	13.05	6.10
J看護婦	13.23	15.90	11.42	4.48
Kタイピスト	16.16	21.18	12.76	8.42
Lテレビ組立係	14.29	18.64	11.36	7.28
M靴下編工	13.53	18.78	9.99	8.79
Nウェイトレス	14.50	20.57	10.40	10.17

＊差＝（中学生の値）－（高校生の値）

これまでみてきたように「看護婦」の職業イメージは，多くの職業の中にあって，比較的安定したものであり，明確さの度合いも中学生段階から強いことがわかる。すなわち，「看護婦」の職業イメージは，中学生段階でかなり明確な形で形成されていて，それは，年齢変化にともなっては変わらないものであると考えられる。

2–3　就職希望の構造からみた看護婦の職業イメージ
―― 数量化理論第Ⅲ類をつかって ――

表4～6，図1～3は，数量化理論第Ⅲ類の結果である。24の職業について，就職希望の有無のパターンを分析したものである。3つの因子を抽出したが，相関係数がそれぞれ0.48，0.43，0.40とあまり大きくない。3因子を合わせても，説明力が23％程度なので必ずしも十分とはいえないが，得られたx値の大きさを目安に，各因子の解釈をし，看護婦への就職希望ということの意味を考察してみたい。第1因子は，プラスで高いのが，「医師，プログラマー，中高の先生」で，マイナスで大きいのが「デパート店員，商店店員，ウェイトレス，靴下編工，テレビ組立係，バス車掌」などであり，いわゆる専門的・技術的な職業がプラス側，販売・サービス的な仕事，生産工程作業などがマイナスの側にみられ専門性の因子と考えられる。ちなみに，この因子と「世間の評価」との関連は非常に強く，24の職業のうち，「世間の評価」の回答もある14の職業について，第1因子と「世間の評価」との相関を求めると－0.91[注]という高い値が得られた。（注：相関係数が負であるのは，「世間の評価」の質問が，「低いか」と問うているからである）第2因子は，「農業」が圧倒的に大きくプラスで，「テレビ組立係」がマイナスで高い値をとっている。値の大きさからみると農業の因子といったほうがあるいは正確なのかもしれないが，他の職業についての×値のあり方も含めて，あえて一般化してみよう。プラスの側では，「医師，中高の先生，看護婦」，マイナスの側では，「オフィスガール，タイピスト」が比較的大きな値を示している。これらプラス側，マイナス側に属する職業に共通にイメージされるものは，1つは，対象が生き物で変化するか否か，2つに職務が対象との関わりで，複合作業的，多種多様な作業を要求されるか，それとも定型的・単能的・事務的な作業を要求されるかといった点であろう。これらのことから少しく一般化した因子の解釈をすれば，第2因子は，職務の複合性の因子と考えることができよう。第3因子は，「テレビ組立係」だけが特に大きい。第2因子同様にもう少し一般化してみると，プラス側で比較的大きな値を示しているのは，「セールスマン，医師，喫茶店経営，看護婦」などで，マイナス側では「テ

レビ組立係，農業，靴下編工，注文服仕立」などである。プラスの側には，対人関係の仕事が多い職業が多く，それに対しマイナス側には，事物を対象にした機械，技術や技能に関連した職業が多くみられる。そこで第3因子を一般化すれば，対人－対物の因子ということができよう。ただし，対人関係の多い，「デパート店員，商店店員・ウェイトレス」などで値がそれほど大きくなく，また「中高の先生」では値が負にもなっているので，必ずしも十分に割切れた解釈というわけではない。

表4　数量化理論第Ⅲ類の結果
－相関(係数)因子毎のx値－

	第1因子	第2因子	第3因子
相関係数	0.48462	0.42619	0.39947
A 医師	3.79813	3.21957	4.98905
B 先生	1.80235	2.60773	-1.03166
C 喫茶店経営	-0.59180	-0.02817	3.20775
D 記者	1.61874	1.35163	0.70441
E オフィスガール	0.44259	-1.91280	-1.40875
F 商店店員	-4.69363	0.01165	1.38299
G 農業	-1.23562	14.88792	-7.87177
H プログラマー	2.36676	-1.08042	-1.67635
I 理・美容師	-1.01648	-1.05950	-0.01920
J 看護婦	-0.53119	2.08158	2.58252
K タイピスト	0.73444	-1.91887	-1.12510
L テレビ組立係	-3.15486	-7.01636	-13.07391
M 靴下編工	-3.53018	0.11020	-7.51966
N ウェイトレス	-3.98450	1.36769	0.88654
Z01重役・社長	1.44994	-0.30545	1.41658
Z02小売店店主	0.18703	0.27493	0.96322
Z03アナウンサー	0.96805	-0.39161	-0.16345
Z04セールスマン	-0.36104	0.41544	5.79298
Z05注文服仕立	-1.56920	-0.33296	-2.89478
Z06栄養士	0.68308	-0.14586	-0.89781
Z07デパート店員	-6.38028	0.02235	0.81767
Z08バス車掌	-1.80214	-0.53605	0.07267
Z09電話交換手	-0.02570	-0.99358	-0.86860
Z10洋服デザイナー	0.49751	-0.57630	-0.41284

以上の3因子の一応の解釈の下に「看護婦」への就職希望ということは他の職業との関係において，どのような位置づけがされているのかをみてみよう。「看護婦」のx値をみてみると，マイナス，プラス，プラスである。看護婦の職業イメージをこの値のあり方から解釈してみると，看護婦という職業は，専門性はふつうかそれほど高いわけではなく，いろんな仕事をしなければならぬ対人関係の多い仕事であるととらえられているといえよう。次に看護婦の就職希望と類似した反応パターンをもつ職業をみてみよう。

3因子のx値から得られた各項目(職業)間の距離が表5に示されているが，類似した反応パターンをもつ職業は「喫茶店等経営，小売店店主」などであり，反応のパターンの類似度の少ないものは，「農業」，「靴下編工，テレビ組立係」などの技能系の職業，「デパート店員，商店店員」などの販売系の職業および，「オフィスガール，タイピスト」などの事務系の職業などがあげられよう。（図1，2も参照）

次に図3は，表5と同じやり方で，3因子のx値をもちいて各項目（職業）の原点からの距離を求めたものである。原点に近い職業は，それに就職希望する者が，他の職業も平均して多く希望することを示し，反対に原点からの距離が大きい職業は，他の職業の就職希望との共通性が少ないことを示している。この表でみると看護婦という職業は原点からの距離では中位よりやや遠い位置にあり，多くの者に，共通して希望される職業ではないことを示している。

最後に，この調査とは別に自由記述で得られた代表的な希望職業毎に，3因子の因子得点の平均値を求めたのが表6である。人数が少ないことや，抽出された因子の説明力の不足などから必ずしもすっきりはしていないが，看護婦希望者（自由記述）の

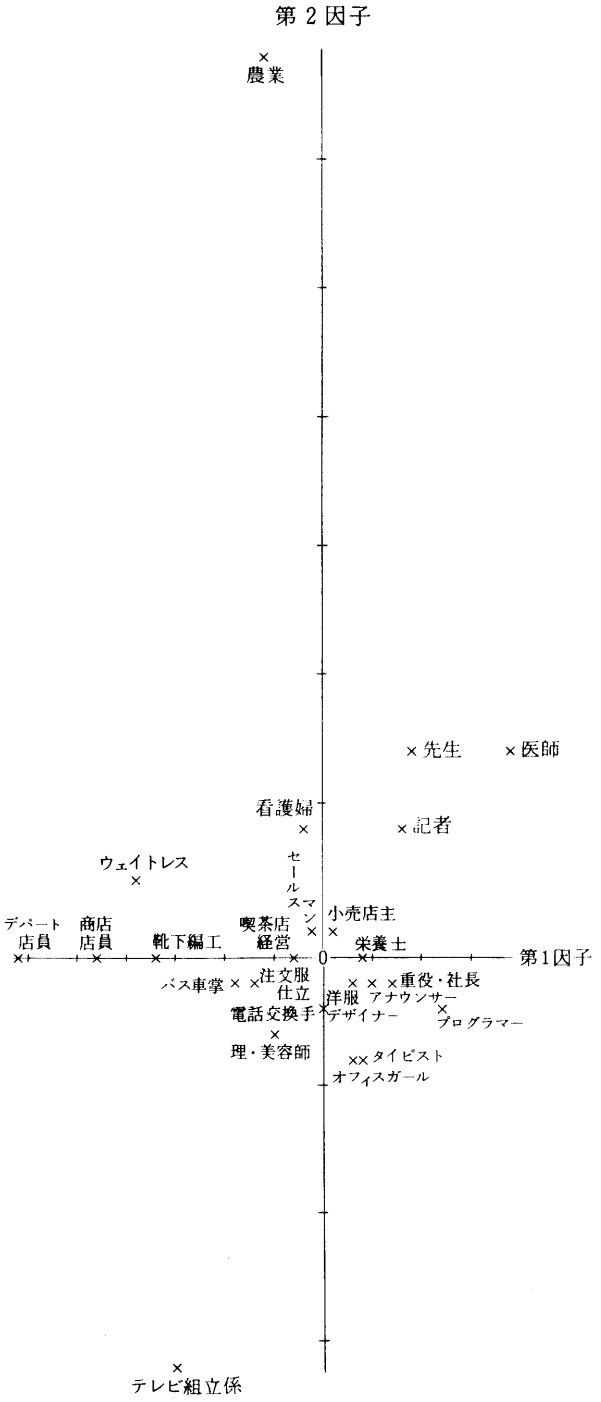


図1　数量化理論第Ⅲ類の結果

—第1因子と第2因子による因子空間における各カテゴリー（職業）の布置—

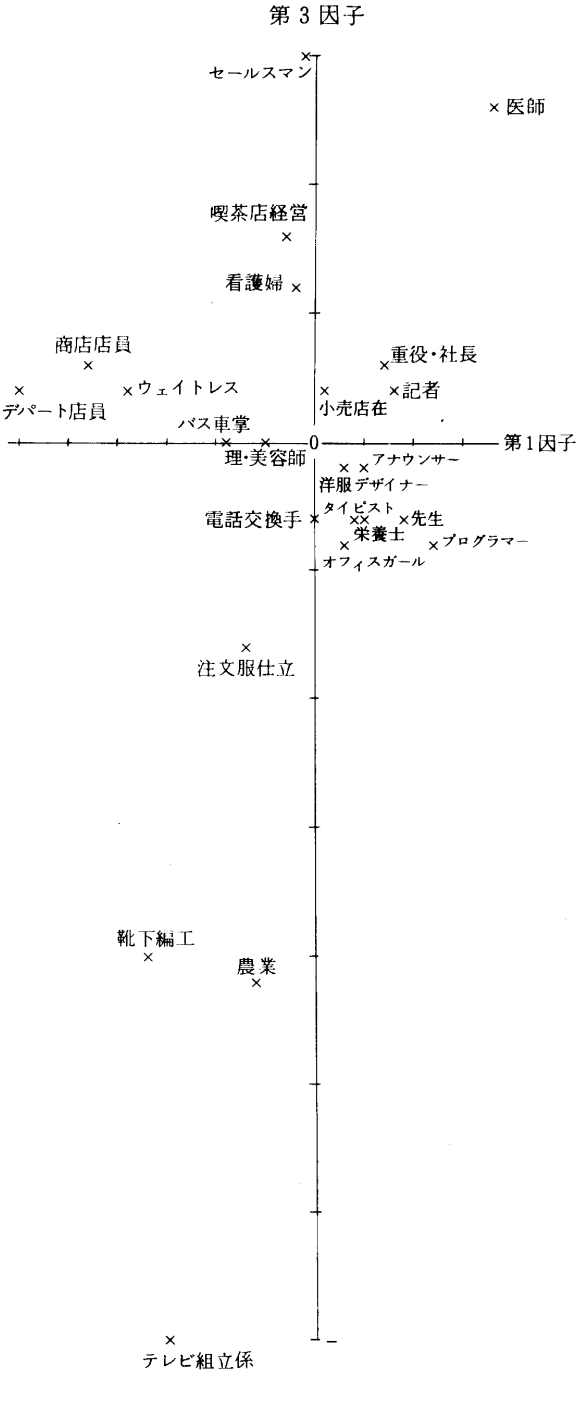


図2　数量化理論第Ⅲ類の結果

—第1因子と第3因子による因子空間における各カテゴリー（職業）の布置—

因子得点のパターンが，他の職業を希望する者とちがっている様子がうかがえる。また，医療保健関係では，サンプルが少なくて不十分ではあるが薬剤師，保健婦を希望する者の因子得点のパターンは，看護婦のそれよりも，医師の得点パターン（表4参照）に近いといえよう。

表5　数量化理論第Ⅲ類の結果
—「看護婦」と各職業との距離—

A	医師	5.08
B	中高の先生	4.33
C	喫茶店経営者	2.20
D	新聞雑誌記者	2.95
E	オフィスガール	5.73
F	商店店員	4.80
G	農業	16.55
H	プログラマー	6.04
I	理・美容師	4.11
J	看護婦	−
K	タイピスト	5.60
L	テレビ組立係	18.30
M	靴下編工	10.72
N	ウェイトレス	3.91
Z01	重役・社長	3.31
Z02	小売店店主	2.53
Z03	アナウンサー	3.99
Z04	セールスマン	3.62
Z05	注文服仕立	6.08
Z06	栄養士	4.31
Z07	デパート店員	6.45
Z08	バス車掌	3.84
Z09	電話交換手	4.65
Z10	洋服デザイナー	4.13

表6　数量化理論第Ⅲ類の結果
—希望職業別の因子得点平均値—

職業	人数	第1因子	第2因子	第3因子
教員	19	0.64	0.88	−0.31
薬剤師	4	0.59	0.34	0.57
保健婦	2	0.98	0.82	0.78
栄養士	8	−0.30	0.23	0.16
看護婦	14	0.02	0.45	0.56
記者・編集者	22	0.53	0.15	0.40
デザイナー	24	0.02	0.08	−0.07
保母	16	−0.84	−0.25	0.08
一般事務員	77	0.10	−0.28	−0.19
小売店主	11	0.15	−0.01	0.82
洋服仕立職	14	−0.62	−0.04	−0.48
美容師	14	−0.46	−0.28	0.17

3　就職希望の形成

3−1　「看護婦」の就職希望群　非希望群の各質問項目への回答

一般的にいって，ある職業のイメージは，その職業への就職希望の有無によって，影響を受けるものである。そこで，Q14の質問への回答をキーにして，看護婦への就職希望と職業イメージとの関連をみてみたい。

表7は，Q14の質問に対し，「そう思う」と回答した者を希望群，「わからない」あるいは「そう思わない」と回答した者を非希望群として，各群毎に職業イメージを求め，さらにχ^2値を計算したものである。統計的に有意な差がみられたのは4項目で，「適性」，「作業環境」，「親の反対」，「将来性」である。この中で，「適性」に関する回答の分布は，希望群・非希望群で大きな違いがみられる。「作業環境」，「親の反対」，「将来性」に関しては，希望群のほうが，非希望群よりプラスのイメージを示している。しかしながら，

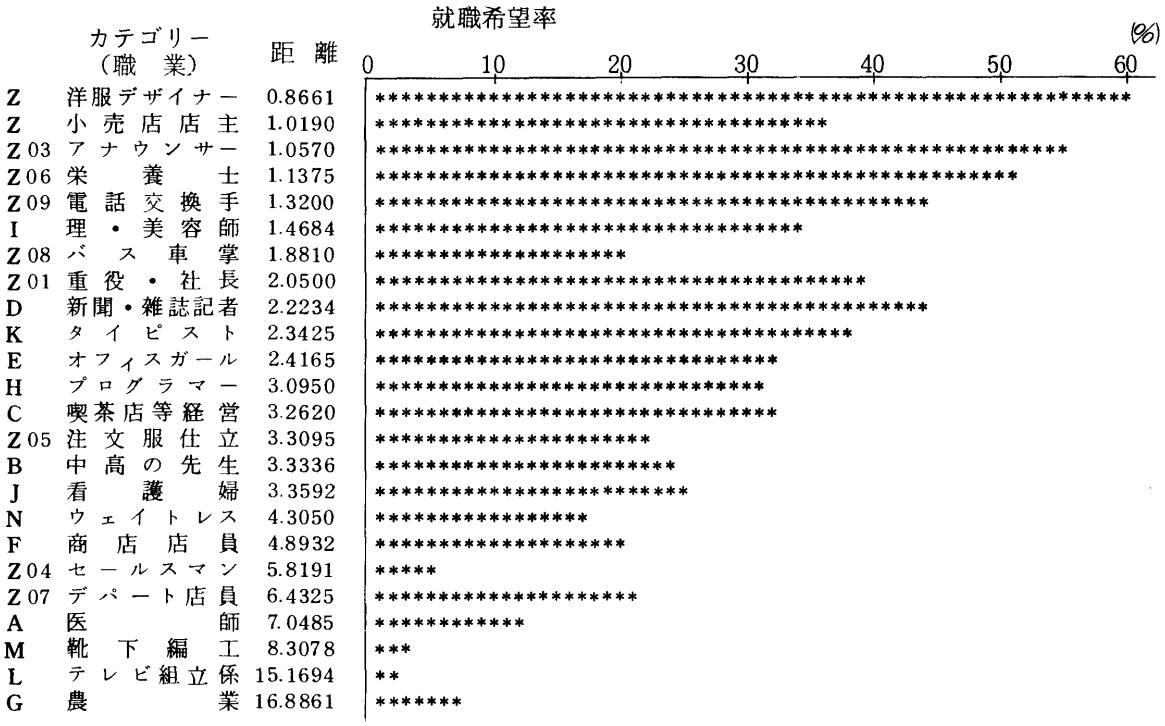


図3 数量化理論第Ⅲ類の結果
－24の職業の原点からの距離－

表7 「看護婦」の職業イメージの希望群・非希望群比較
（希望群＝100，非希望群＝304）

		そう思う	わからない	そう思わない	χ^2 値
Q1 収入	希望	23	20	57	0.49
	非希望	60	64	180	
Q2 作業環境	希望	62	8	30	19.30 ＊＊
	非希望	114	57	133	
Q3 早朝・深夜の労働	希望	96	－	4	1.28
	非希望	298	－	6	
Q4 日曜・祝日の休み	希望	93	3	4	5.53
	非希望	292	1	11	
Q5 疲労	希望	96	1	3	0.91
	非希望	294	5	5	
Q6 仕事の単調さ	希望	11	11	78	0.62
	非希望	28	28	248	
Q7 仕事の自律性	希望	8	12	80	4.24
	非希望	10	32	262	
Q8 適性	希望	45	32	23	121.59 ＊＊
	非希望	13	67	224	
Q9 親の反対	希望	26	11	63	8.03
	非希望	78	72	154	
Q10 身体の汚れ	希望	33	12	55	1.19
	非希望	92	50	162	
Q11 世間の評価	希望	18	15	67	0.14
	非希望	52	50	202	
Q12 将来性	希望	43	24	33	6.78 ＊
	非希望	88	90	126	
Q13 技能習得の困難度	希望	86	3	11	5.19
	非希望	232	27	45	

＊5％　＊＊1％

残りの９項目については，希望群の方が非希望群よりプラスのイメージをもっている傾向は示しているが，必ずしも有意な差はみられない。就職希望の有無と職業イメージとの間に一定の予想された関係は見られたけれど，看護婦イメージの特徴は，むしろ，就職希望の有無にそれほど影響を受けないことにあるようである。

表８は，比較のため，「中高の先生」と「オフィスガール」の２職種について，「看護婦」同様の整理をしてみたものである。これをみると，「中高の先生」の場合，有意な差がみられるのは，「収入，作業環境，適性，親の反対，身体の汚れ，将来性，技能習得の困難度」の７項目，「オフィスガール」にいたっては，「収入，作業環境，疲労，仕事の単調さ，仕事の自律性，適性，親の反対，世間の評価，将来性，技能習得の困難度」の10項目と多い。これらに対し，「看護婦」において両群で挙があったのは，４項目と非常に少ないことがわかる。

表８　「看護婦」「中高の先生」「オフィスガール」の職業イメージの希望群・非希望群比較

	J 看護婦 (希＝100, 非＝304)	B 中高の先生 (希＝95, 非＝309)	E オフィスガール (希＝125. 非＝279)
			－χ^2値－
Q１ 収入	0.49	9.66＊＊	29.30＊＊
Q２ 作業環境	19.30＊＊	12.03＊＊	27.82＊＊
Q３ 早朝・深夜の労働	1.28	1.52	2.88
Q４ 日曜・祝日の休み	5.53	0.80	0.11
Q５ 疲労	0.91	0.65	11.30＊＊
Q６ 仕事の単調さ	0.62	1.97	7.08＊
Q７ 仕事の自律性	4.24	2.44	6.01＊
Q８ 適性	121.59＊＊	111.95＊＊	219.83＊＊
Q９ 親の反対	8.03＊	10.98＊＊	29.29＊＊
Q10 身体の汚れ	1.19	9.69＊＊	4.46
Q11 世間の評価	0.14	3.14	11.02＊＊
Q12 将来性	6.78＊	14.48＊＊	23.77＊＊
Q13 技能習得の困難度	5.19	6.88＊	6.20＊

＊5%　＊＊1%

３－２　就職希望の要因分析

―数量化理論第Ⅱ類をつかって―

ところで以上の分析では，就職希望の有無と各項目をクロスさせてその関連を検討したわけであるが，次に就職希望の有無に各項目がどのように影響を与えているのかという点について各項目間の相互関係も含めて分析してみよう。

表９，10と図４，５は，中学生・高校生別に，数量化理論第Ⅱ類によって解析した結果を示したものである。この手法は，各説明変数(＝13項目)が，外的基準（＝就職希望の有無）に対して，どの程度の大きさで影響しているかを計算しようとするものであり，質的な変数を用いて判別関数を求めるもので，具体的には，希望群の各項目への回答傾向と非希望群の各項目への回答傾向から，各項目に含まれるカテゴリー（「そう思う」「わからない」「そう思わない」）に重みかけし，２群の得点分布がより分離するように解析する手法である。

表中でカテゴリースコアは，各項目に含まれる

表9　数量化理論第Ⅱ類　—反応数，カテゴリースコア，偏相関係数—
（中学生）

項目	カテゴリー	回答数 計	希望群	非希望群	カテゴリースコア	偏相関係数
Q1 収入	望んでいるだけ得られる	35	15	20	0.09615	0.041
	わからない	43	15	28	0.01055	
	望んでいるだけ得られない	85	25	60	−0.04493	
Q2 作業環境	悪くない	71	37	34	0.40866	0.264
	わからない	29	5	24	0.53128	
	悪い	63	13	50	−0.21600	
Q3 早朝・深夜の労働	ある	156	51	105	−0.00102	0.004
	ない	7	4	3	0.02276	
Q4 日曜・祝日の休み	休めるとは限らない	153	48	105	−0.03442	0.119
	わからない	3	3	0	0.96558	
	休める	7	4	3	0.33847	
Q5 疲労	疲れる	156	52	104	−0.01246	0.083
	わからない	3	0	3	−0.22512	
	疲れない	4	3	1	0.65471	
Q6 仕事の単調さ	単調だ	15	9	6	1.05571	0.266
	わからない	17	7	10	0.16731	
	単調でない	131	39	92	−0.14259	
Q7 仕事の自律性	自分でペース決められる	10	7	3	0.25791	0.162
	わからない	29	7	22	−0.42383	
	自分でペース決められない	124	41	83	0.07832	
Q8 適性	自分に向いている	29	25	4	1.54726	0.531
	わからない	48	17	31	0.21647	
	自分に向いていない	86	13	73	−0.64257	
Q9 親の反対	親は反対する	30	12	18	0.01065	0.091
	わからない	43	7	36	−0.19032	
	親は反対しない	90	36	54	0.08738	
Q10 身体の汚れ	汚れる	54	15	39	−0.09693	0.069
	わからない	32	8	24	−0.06250	
	汚れない	77	32	45	0.09395	
Q11 世間の評価	比較的低い	28	10	18	0.07685	0.085
	わからない	29	9	20	0.20303	
	比較的高い	106	36	70	−0.07584	
Q12 将来性	見通し明るい	53	24	29	−0.12972	0.063
	わからない	51	15	36	0.04758	
	見通し明るくない	59	16	43	0.07540	
Q13 技能習得の困難度	むずかしい	134	47	87	0.13396	0.214
	わからない	10	1	9	−0.51561	
	むずかしくない	19	7	12	−0.67338	

表10　数量化理論第Ⅱ類の結果　—反応数，カテゴリースコア，偏相関係数—
（高校生）

項目	カテゴリー	回答数 計	希望群	非希望群	カテゴリースコア	偏相関係数
Q1 収入	望んでいるだけ得られる	48	8	40	−0.00392	0.070
	わからない	41	5	36	0.08383	
	望んでいるだけ得られない	152	32	120	−0.02138	
Q2 作業環境	悪くない	105	25	80	−0.03171	0.100
	わからない	36	3	33	0.13150	
	悪い	100	17	83	−0.01405	
Q3 早朝・深夜の労働	ある	238	45	193	0.00312	0.049
	ない	3	0	3	−0.24718	
Q4 日曜・祝日の休み	休めるとは限らない	232	45	187	−0.00714	0.070
	わからない	1	0	1	0.12284	
	休める	8	0	8	0.19176	
Q5 疲労	疲れる	234	44	190	−0.01202	0.197
	わからない	3	1	2	−0.15297	
	疲れない	4	0	4	0.81799	
Q6 仕事の単調さ	単調だ	24	2	22	0.08437	0.063
	わからない	22	4	18	−0.06634	
	単調でない	195	39	156	−0.00290	
Q7 仕事の自律性	自分でペース決められる	8	1	7	0.06349	0.078
	わからない	15	5	10	−0.15277	
	自分でペース決められない	218	39	179	0.00818	
Q8 適性	自分に向いている	29	20	9	−0.79116	0.546
	わからない	51	15	36	−0.20941	
	自分に向いていない	161	10	151	0.20884	
Q9 親の反対	親は反対する	74	14	60	−0.00284	0.006
	わからない	40	4	36	0.00667	
	親は反対しない	127	27	100	−0.00045	
Q10 身体の汚れ	疲れる	71	18	53	−0.10151	0.129
	わからない	30	4	26	−0.00247	
	疲れない	140	23	117	0.05201	
Q11 世間の評価	比較的低い	42	8	34	−0.04154	0.086
	わからない	36	6	30	−0.09173	
	比較的高い	163	31	132	0.03096	
Q12 将来性	見通し明るい	78	19	59	−0.05256	0.108
	わからない	63	9	54	0.10240	
	見通し明るくない	100	17	83	−0.02352	
Q13 技能習得の困難度	むずかしい	184	39	145	−0.03253	0.116
	わからない	20	2	18	0.05290	
	むずかしくない	37	4	33	0.13319	

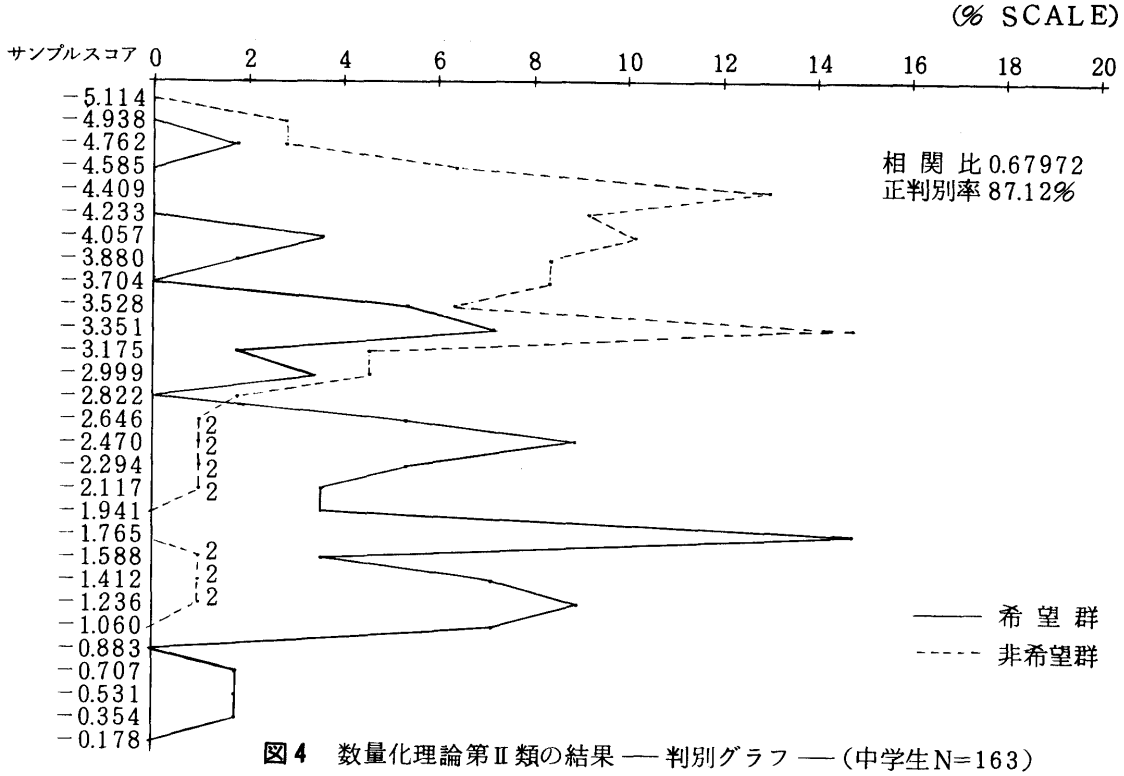


図4 数量化理論第Ⅱ類の結果 ── 判別グラフ ──（中学生N=163）

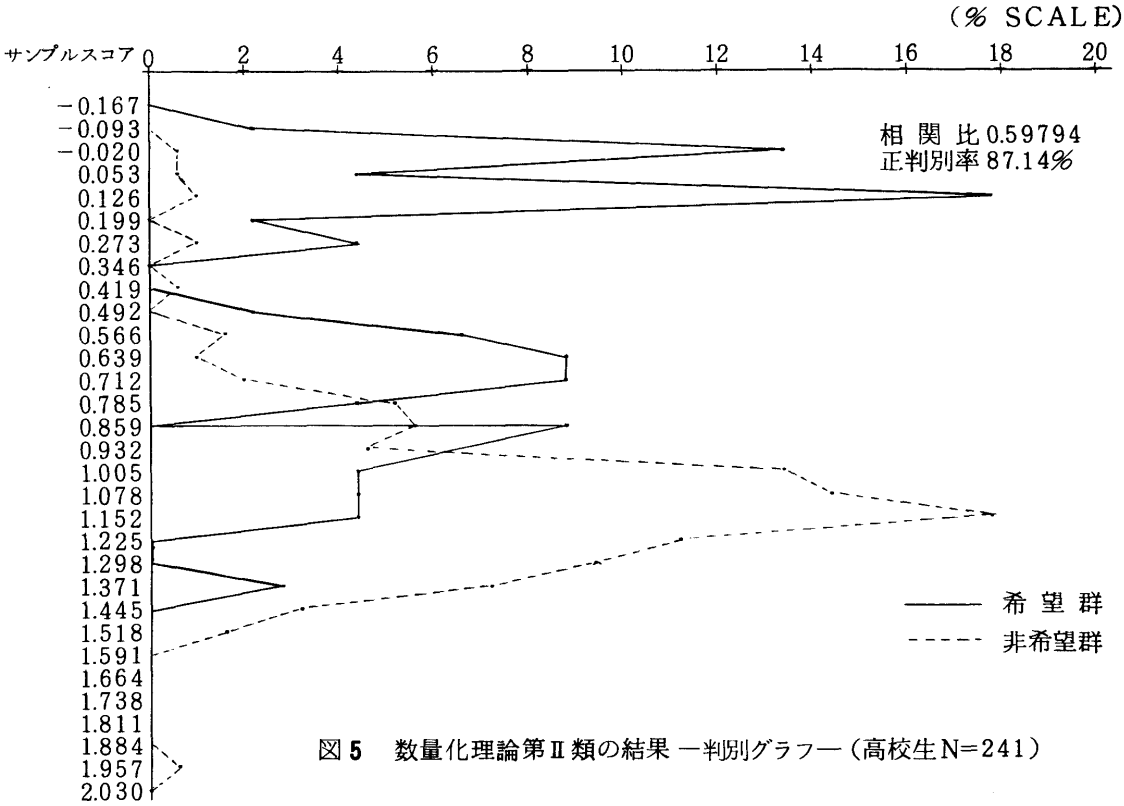


図5 数量化理論第Ⅱ類の結果 ─判別グラフ─（高校生N=241）

カテゴリーに与えられた重みであり，偏相関係数は，そのカテゴリースコアの総和と項目との偏相関係数でその項目の外的基準に対する影響の度合いを示している。

表9，10から就職希望の有無に影響を与える説明変数の大きさを読みとってみよう。まず中学生についてみると，偏相関係数が最も大きいのは，「適性」である。すなわち，希望群の場合，その45.4％の者が，「この仕事は自分に合っている」と回答しているのに対し，非希望群の場合は，3.7％にすぎない。また，「適性」について，「わからない」という回答はカテゴリースコアの値をみると，希望ありの方に重みずけられている。次に大きいのは，「仕事の単調さ」である。この項目では，希望群の方が，非希望群に比べ，「単調である」と判断する割合が高くなっている。次に大きな偏相関係数をもっているのが，「作業環境」である。この項目では，「わからない」と「環境が良くない」という回答は，非希望の方に重みつけられている。その他，「技能習得の困難度」も比較的大きいが，偏相関係数をみる限り，その他の項目が，就職希望の有無の判別に大きな影響をもっていないことがわかる。

高校生の結果は，中学生に比べ少々趣きがちがっている。偏相関係数で最も大きな値を示したのは，「適性」に関する項目である点では中学生と同じであるが，高校生の場合は，その他の項目で，偏相関係数が大きなものが見当たらないということである。「適性」に対する反応は，希望群の44.4％が，「自分に向いている」と反応しているに対し，非希望群のうち，わずか4.6％の者が「自分に向いている」という回答をしているにすぎない。

以上のように数量化理論第Ⅱ類によって，就職希望の有無を外的基準とし，13の職業イメージ項目による影響を調べてみた結果は，「適性」＝「自分に向いている」という判断が，圧倒的に影響力をもつ項目であり，その傾向は，中学生より高校生の方が著しいことがわかった。また，数量化理論第Ⅱ類から得られた判別関数においては，中学生・高校生とも87％位のかなり良好な正判別率を示した。（図4，5参照）

4. むすび

既存の調査データを再集計することを通して，中学生・高校生の看護婦の職業イメージの諸特徴を整理してきたが，最後に，それらをまとめ，今後の課題を考えてみたい。

まず第1に，特徴としてあげられることは，看護婦の職業イメージが，中学生段階で，かなり明確な形で形成されているという点であろう。それは，イメージの明確さの1つの目安としての「わからない」という回答率の低さや，他職業と比較して，各質問項目への回答の学年変化の少ないこと，さらに，就職希望の有無によっても，それほど大きな違いがみられないことなどから十分推測されることである。それ故，先に，看護婦という職業は希望者が年令増加にともない漸減する職業であることを述べたが，この現象も，年令増加にともなって，看護婦に関する職業情報が増加し，見方が変わってくるという側面より，むしろ，職業全体に対する見方，枠ぐみ全体が変化する中で，看護婦の評価が相対的に低下してゆく現象としてとらえるべき問題であると思われる。そうであるなら，今後はいろいろな職業に対する評価の枠ぐみが年令変化とともにどのように変わっていくのか，また，そのような変化にかかわっていく要因としてはどんなものが考えられるのか，さらに，諸要因の中で，就職希望をむすびついていくのはどのような要因なのかというような諸点を解明してゆくことが課題になってくるであろう。

第2の特徴は，看護婦という職業は，職業分類上，専門的技術的な職業に分類され，実際，高度に専門的な技術・知識を要請される職務であるにもかかわらず，中学生・高校生は必ずしもそのようにはとらえていない点である。それらは中学生

・高校生が日常接し，職業イメージを形成する材料となっている看護活動・看護婦の職務から考えると納得できる点も少なくない。しかし，医療活動が日常生活に密着しすぎているため，そこで形成されたイメージが固定され，先に述べた年令変化に伴ない職業全体に対する見方，枠ぐみが変化する中で，地盤沈下していくとしたら，看護界にとっても，自分の進路を選ぼうとしている中学生・高校生にとっても不幸なことと言わねばならない。年令変化にともなう職業全体に対する見方，枠ぐみの変化に即応した，看護婦や看護活動に対する適切な職業情報の提供が望まれるのである。

第3に，看護婦の就職希望において特別にということではないけれど，就職を希望するということに関して「適性」ということが非常に重要な鍵になっていることをこのデータは示している。職業心理学においても，概念構成上は，適性についていろいろと論じられてはいるが，個人の「適性判断」の実態についてはほとんど研究がすすんでいないといってよいであろう。成長期にある中学生・高校生が自分がある職業に向いている（あるいは，向いていない）という判断を，どのようにして下すのかということも今後の解明すべき課題として考えていかなくてはならぬものであろう。

注

1）岡本，松本「進路選択状況調査報告」
日本看護協会調査研究<報告№3＞1977
2）岡本「職業イメージと職業選択」
職業研究所研究紀要№3，1972
3）岡本「青少年の職業観：職業意識と看護婦不足問題」
日本看護協会調査研究<報告№1＞1975

付録 1.

呈示された職業名

A	医　　師	Z 01	大きな会社の社長や重役
B	中学・高校の先生	Z 02	小売店の店主
C	喫茶店・すし屋などの経営者	Z 03	アナウンサー
D	新聞・雑誌の記者	Z 04	セールスマン
E	会社・銀行などのオフィスガール	Z 05	注文服の仕立
F	商店の店員	Z 06	栄 養 士
G	農　　業	Z 07	デパートの店員
H	プログラマー	Z 08	バス車掌
I	理容師・美容師	Z 09	電話交換手
J	看 護 婦	Z 10	洋服のデザイナー
K	タイピスト		
L	テレビ組立係		
M	靴下編工		
N	ウェイトレス		

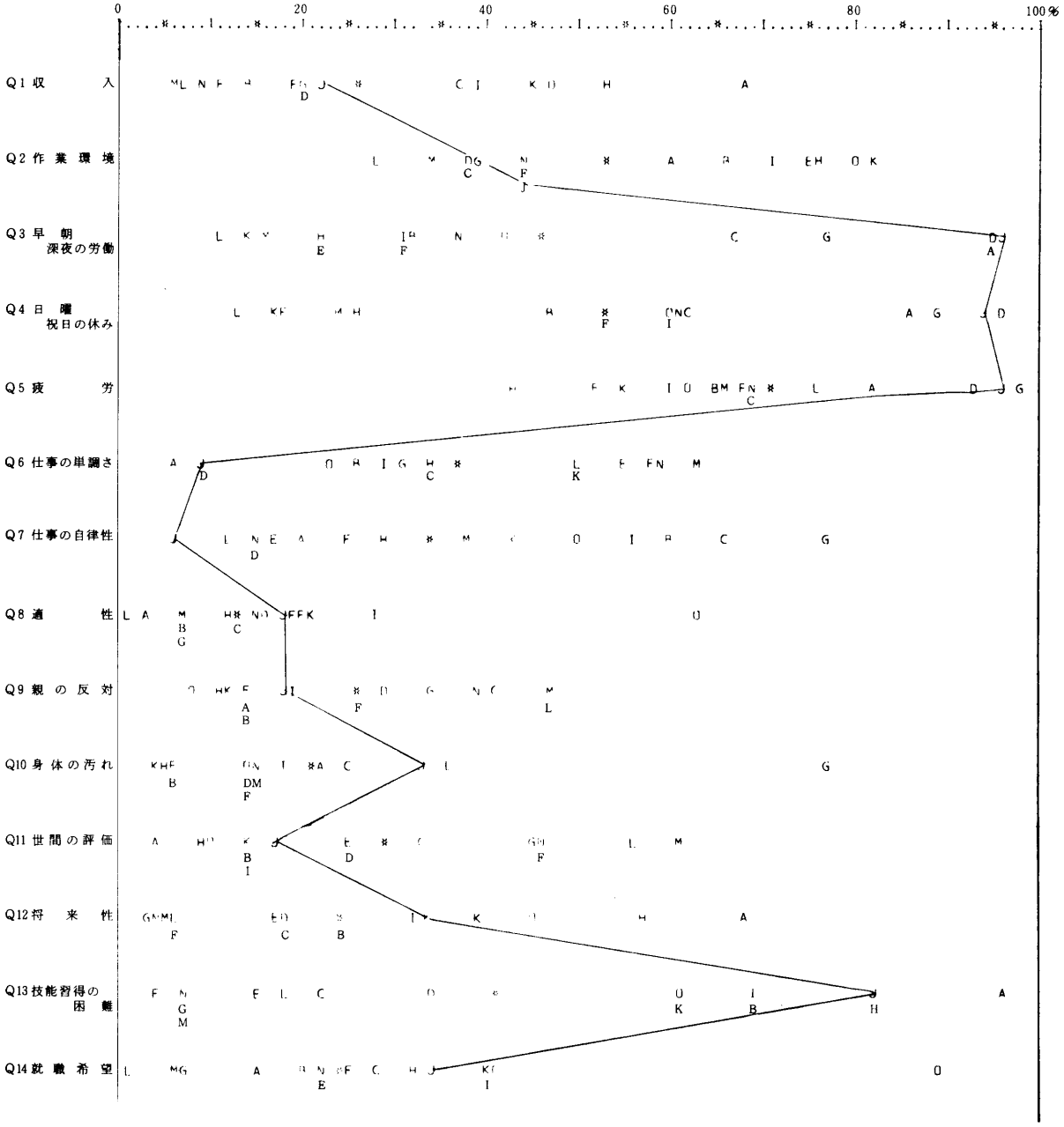
（Z 01 ～ Z 10 はQ 14 のみ質問）

付録 2.

質 問 文

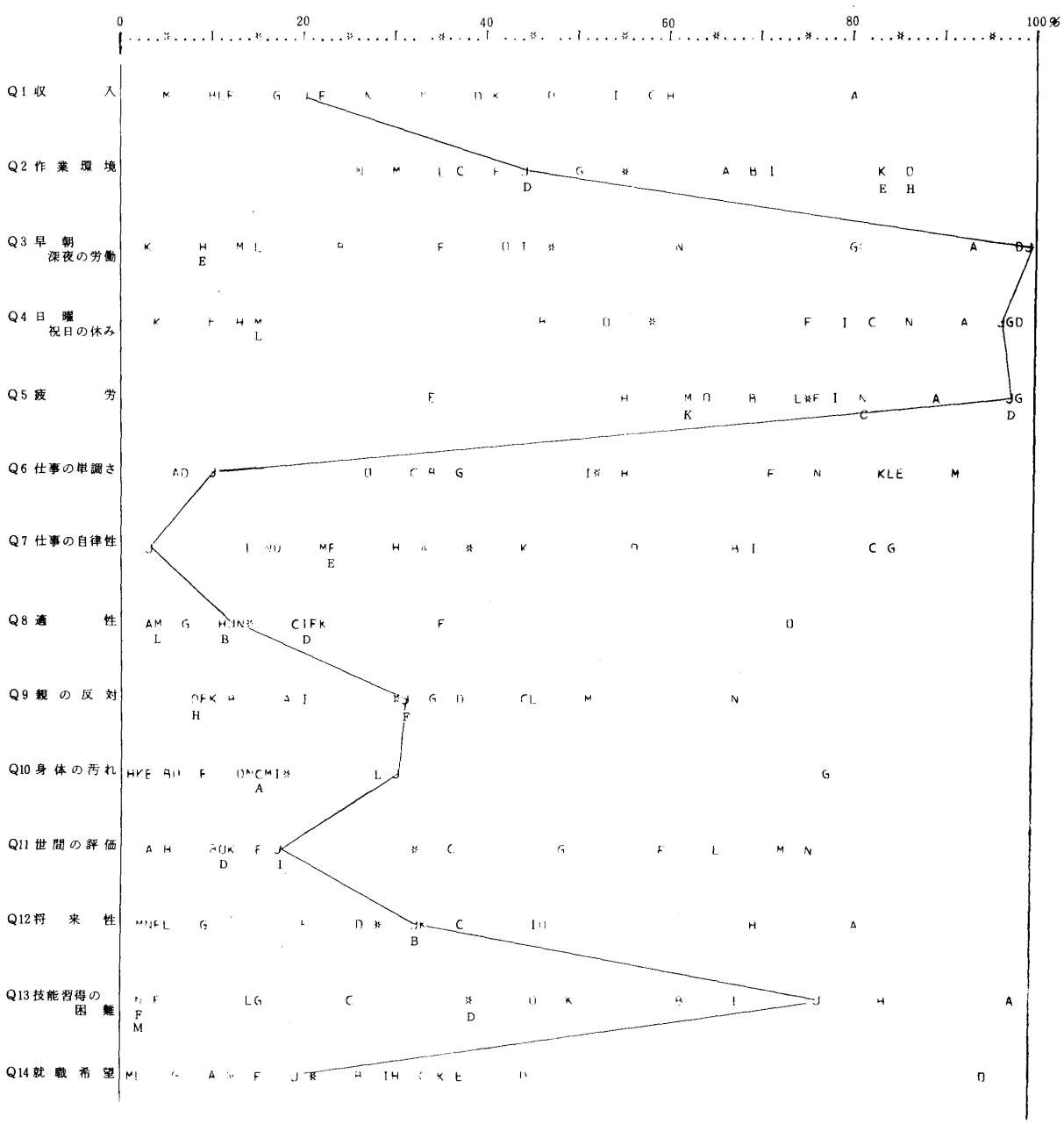
Q 1	この職業なら，自分の望んでいるだけの収入が得られる。
Q 2	この職業は，仕事をするときの環境が悪くない。
Q 3	この職業は，早朝や深夜に働くことがある。
Q 4	この職業は，日曜や祝日に休めるとは限らない。
Q 5	この仕事は疲れる。
Q 6	この仕事は単調である。
Q 7	この仕事なら，自分で仕事のやり方やペースを決められる。
Q 8	この職業は自分に向いている。
Q 9	この職業に就くことを望んだら，親は反対するだろう。
Q10	この仕事では，身体が汚れる。
Q11	この職業は，世間の人の評価が比較的低い。
Q12	この職業に就けば，将来の見通しが明るい。
Q13	この職業に必要な技能をおぼえたり，資格をとるのがむずかしい。
Q14	この職業なら，就いてみたい。

（回答は「そう思う」，「そう思わない」，「わからない」のうち1つを選択する。）

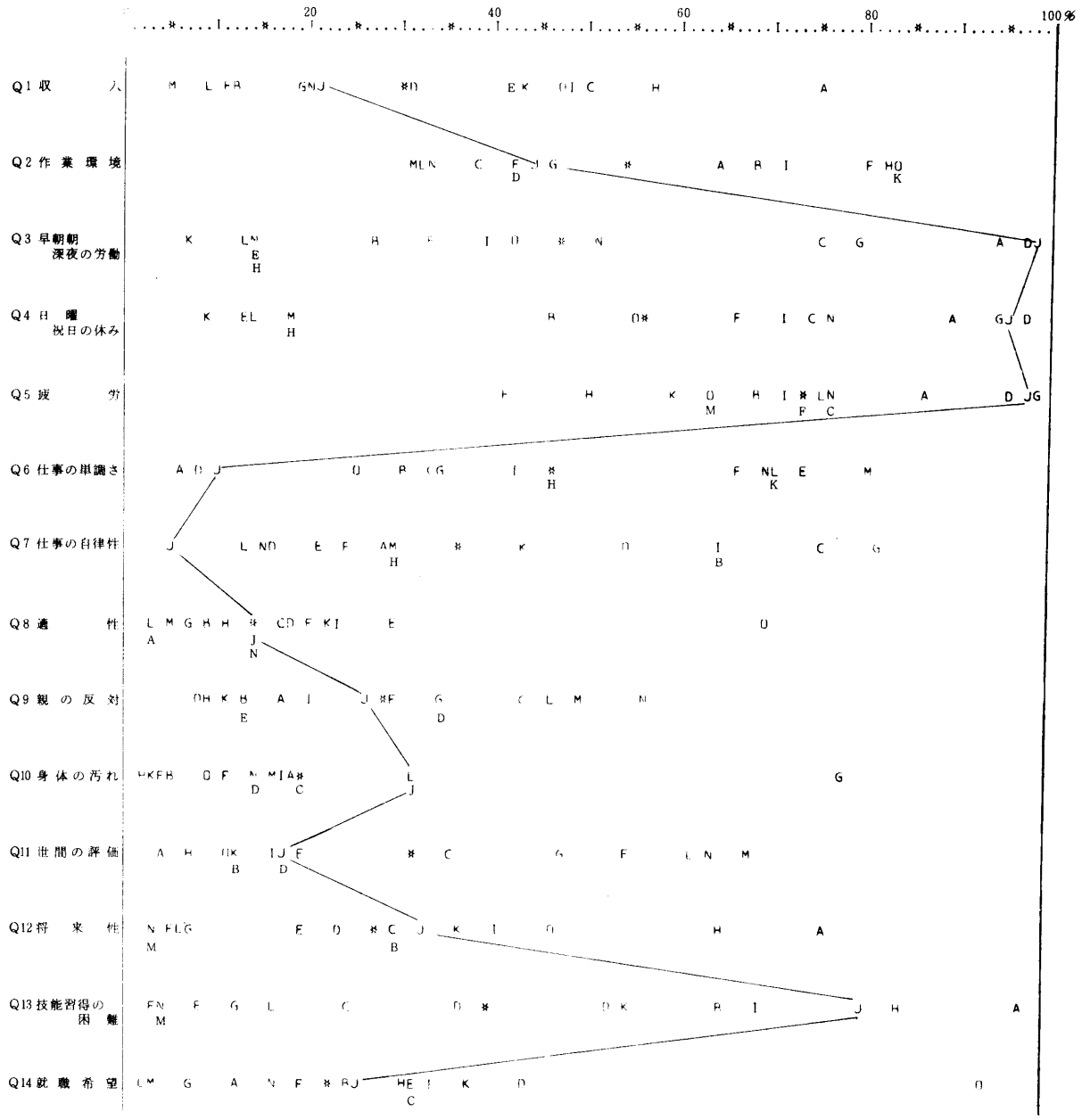


付図1　14職業の各質問への「そう思う」回答率(中学生N＝163)

（図中　A～Nは　職業につけた記号
Q　は　希望職業のイメージ
＊　は　14職業の平均
実線は「看護婦」イメージプロフィール）



付図 2　14職業の各質問への「そう思う」回答率（高校生N＝241）
（凡例は付図１と同じ）



付図3　14職業の各質問への「そう思う」回答率（中高計N＝404）
（凡例は付図1と同じ）

The Vocational image of 'Nurse' perceived by high school girls

Junpei Matsumoto　　Hideo Okamoto

This research was purposed to clarify' high school girls' vocational image of 'Nurse' and consider some basis for their aspiration to 'Nurse'.

The subjects used for this study were 404 junior and senior high school girls in several areas in Japan. They were showed 14 occupations including 'Nurse,' 13 items of vocational image for each, and asked to choose one of three alternatives (Yes, ?, No) concerning some item for some occupation. They were also showed 24 occupations to know their occupational aspirations.

Concerning to the vocational image of 'Nurse,' the followings were found.

1. The Vocational image of 'Nurse,' was stable and clear-cut over high school years as compared with the other occupations.
2. The result analyzed by means of Quantification Model Ⅲ by Hayashi showed they perceived 'Nurse' jobs as follows, they have moderate speciality, are not routine work, and the person-to-person relationship plays important part of them. These characteristics perceived by high scool girls were similar to 'Manager of Coffee house', and were not similar to 'Farmer', 'Office girl' and 'Typist'.
3. In the relationships between aspiration to 'Nurse' and 13 items of vocational image of 'Nurse', 4 relationships (vocational fitness, vocational environment, prospectiveness, objection of parents) were statistically significant.
4. The discriminant analysis (Quantification Model Ⅱ by Hayashi) of aspiration to 'Nurse' showed that vocational fitness discriminated between those who aspired to 'Nurse' and those who not aspired. The other items were not discriminated very much. The discriminating power of vocational fitness tended to increase through high school years.